

日本の美の多様性について

エミリア・シャロンドン

最近ますます取り上げられている「日本の美」は、わび・さびの範囲で説かれ続けている。それでいいのか。ある日、このような疑問に目覚めた。そのきっかけとなったのは、桜の色は地味な日本の色に似合わないという展覧会の時に聞いたあるヨーロッパ人の意見であった。その少し後、二〇一四年、研究者に最適な環境を提供してくれる日文研で研究する機会に恵まれ、学んできたことを考え直すチャンスが訪れた。そこで、「日本の美」イコール「わびの美」を問い直す鈴木貞美先生の共同研究会の成果報告として出されていた『わび・さび・幽玄―「日本的なるもの」への道程』（水声社、二〇〇六年）に出会った。著書の冒頭に、鈴木先生も、どうして日本文化は数多くの要素を含んでいると承知ながら、「わび」「さび」「幽玄」こそ「日本的なるもの」であるという思いが日本人の心にひそんでいるかと、問いたです。そこで、私の疑問は、日本の美意識の問題から、もっと大きな「日本的なるもの」の問題に触れ始めた。日本の美意識という概念は「日本的なるもの」の一部として取り上げられているからである。鈴木先生によれば、わび・さびが「日本的なるもの」として確定されるのは一九七〇年代に行われたユネスコ・アジア文化センターが行った日本の伝統文化に関する調査から始まった。他方、鈴木先生が紹介する前衛画家の岡本太郎は、その事を明治時代の国家主義官僚に始まると考えた。鈴木先生によれば、岡本太郎はこの国家主義官僚の中心に岡倉覚三（天心）を

据えた。このようにして、問題を探るのに、私は岡倉天心と深い関係があると考えられている
Histoire de l'art du Japon という本を開いた。

一九〇〇年のパリ万博の日本展覧会に合わせて帝国博物館によって編纂された *Histoire de l'art du Japon* (後ほど『稿本日本帝国美術略史』として日本語で出版された) は、歴史的な流れに沿って様々な日本美術の様式をまんべんなく詳しく紹介している。公家と武家の趣味の違いやその違いの上に成り立つ絢爛と素朴さの美学が、対比的に取り上げられている。どちらかといえば、貴族の趣味が日本的なものとして高く評価されている。茶の湯が日本の美学に及ぼした影響も指摘されながら、わび・さびの美は、あくまでも茶道の枠にしか評価されていない特殊な趣味として紹介されていた。つまり、日本美術を発展していくものとして紹介する本であった。また、支配層・庶民・知識人の趣味も区別され、美意識の中心は時代の流行により動くものとして説かれていた。日本の社会を、当時の社会階級(官人、農民、職人、商人)ではなく、文化や美意識の立場から公家、武家、庶民、知識人に分けていたことはとても興味深かった。知識人を別の社会層として取り上げるのは、日本文化を理解するのに大きな意味があると感じた。それらの社会層の対立は美術の中心を移動していたというアイデアはとても興味深かった。つまり、対立かどうかは別にして、「日本の」美意識の中心は一つのものではなく、四つの異なる範囲を動くと考えられることである。

日本の帝国博物館館長であった九鬼隆一男爵が書いた序文によれば、当初『稿本日本帝国美術略史』の編集主任に岡倉天心が選ばれていた。岡倉天心は『茶の本』などにおいて、「わび・さび」を日本なる美意識として位置付ける。それでは、どうして『稿本日本帝国美術略史』はこのような考え方を表すことなく、様々な様式からなる日本の美学を紹介するのだろうか。答

えは二つある。

一つは、九鬼隆一の序文から窺われる。岡倉は途中で編集から離れさせられたわけである。実は、九鬼隆一の保護を受けていた岡倉は、ロマンチックな事件に巻き込まれた。九鬼は、岡倉に、妊娠している妻をヨーロッパから日本に帰る際、お伴してくれるように頼んだ。そこで、まさしくトリスタンとイゾルデの物語のように、若い二人は恋に落ちた。九鬼は妻と離婚した。彼の息子が岡倉天心のそばで育ち、岡倉を父のように愛し彼の思想に大きな影響を受けた。そして日本の美学・美術史は偉大な九鬼周造を得た。しかし、岡倉は美術学校の校長のポストも、『稿本日本帝国美術略史』の編集主任のポストも失った。『稿本日本帝国美術略史』（帝國博物館編、農商務省、一九〇四年）は、東京美術学校西洋学科の一教官、福地復一により完成された。序文によれば、福地は岡倉が考えていた内容をかなり変更した。

もう一つの答えは、岡倉自身の日本人の美意識に関する見解が思いがけない形で残されており、そこから迎えることができる。『稿本日本帝国美術略史』と同じ頃に、外国人のために考えられたもう一冊の本が出版された。日本民族の様子に重点を置く、*Japan, described and illustrated by the Japanese*（『日本人がみずから描いた日本』）である。その本は英語で書かれ、一八九八年ポストンに出版された。なんと、その本には岡倉天心のかなり違った考え方を表す一〇枚のエッセイが載せられている。

『日本人がみずから描いた日本』の編集者、フランシス・ブリンクリー（一八四一〜一九二二）はもともとイギリスの砲兵隊軍人だった。日本に愛着心を感じ、日本に住み着いて、『ジャパン・ポスト』の編集者やイギリスの『タイムズ』新聞のジャーナリストを務めた人物であった。当時の大臣、金子堅太郎（一八五三〜一九四二）が書いた序文によれば、この

本は想像ではなく事実を表し、日本人自身によって書かれているので、日本文化の専門家でない外国人が作り出した日本の間違った印象を正そうとしている。読んでみると、イギリス人のブリックリーが書いたような様式で、ブリックリーの著書（どちらが先に書かれたかいいにくい）からそのまま載せられた部分もある。とにかく、その本の目的は、日本の歴史、宗教や行事、そして財政と外交というテーマで、日本国全体を紹介することである。『日本人がみずから描いた日本』は当時どこまで人気があったかわからない。そこに日本の美、民族の美意識を把握できる手がかりを少なくともこの私には見つけられなかった。写真は当時の様々な日本人や生活様式を見せるものとして興味深い、文章とは全く一致しないので、写真だけではよくわからない。

それに対して、そこに載せられた岡倉天心のエッセイは、本文よりずっと興味深い。コンパクトながら、専門家の知識を活かした日本の美術の紹介として貴重なものである。これらのエッセイは、一〇枚の絵画を通じて日本の美術や趣味を説明しようとする。それらのエッセイとの出会いは驚きそのものだった。そこで岡倉は他の英語の著書と正反対の立場に立っていることはその驚きの一つである。「徳川時代の絵画一枚」において彼は「足利勢力」は「藤原文化の炎を完全に消した」というような激しい表現により、武家の趣味に対する自らの態度を示した。「足利の優美な純粋主義を好転した」豊臣秀吉時代の「仮の光彩」さえ「本当の足利以前の感情を復活させる」ことができなかつたという悲しむような指摘において、『稿本日本帝國美術略史』と同じく貴族の趣味への憧れが感じられる。その中で、とくに注目されるのは、水墨画に対しての姿勢である。一七世紀の光琳派の画家たちは、流行の狩野派が描いていた「清純な景色と冷静な姿」の水墨画に対して「昔の巨匠たちの暖かい彩」を「借りた」。水墨画

の冷たさと強さがそれ以前と以後の暖かさと淑やかさに対比されている。光琳派における「暖かい彩の自由な扱い方」は「時代の武士的活力に対して俗人の対立として重要」である。足利時代において引き立てを嫌う趣味の成立に役立った禅も批判される。「自然を自然として無視することにより」、禅は「美術をグロテスクへ導いた」という記述は、禅と自然との関係について現代の私たちにはなじみにくい。『東洋の理想』で足利時代の美術を賛美し、『茶の本』で日本美術の展開における禅思想の重要な役割を高く評価する岡倉とは全く違う姿である。

以上のような態度から、これらのエッセイを書いたときの岡倉は、水墨画やわび・さびの文化が日本の特徴をなしたという立場に立っていなかったと考えるしかない。ちなみに、「足利時代の絵一枚」のエッセイの最後に、雪舟と雪村の作品を優れたものとして認める文章がある。しかし、水墨画の例は一枚も紹介されていない。

岡倉は最初の一ヶ月だけ『稿本日本帝国美術略史』の編集者だった。そのとき彼は日本の美術を二〇枚の絵画で紹介するつもりだった。それらの挿絵の一〇枚が、結局、『日本人がみずから描いた日本』に載せられたのではないかと考える。それは一八八九年のことであった。そして、インドに旅をした後、一九〇五年あたりに彼はボストンに移った。日本から離れた岡倉は、日本の美意識について以前と違った見方に立った。確かに、自分の文化を中から見るときと、外へ出て外国人に説明しようとしているときとで、見方が変わる場合がある。わび・さびの優れた美学やその日本文化への影響は、海の向こうから日本を見つめたとき、岡倉に本当の姿を見せたのであろう。

ところが、教養のある岡倉には、一つの大きなポイントがみえなかった。わび・さびの優れた美学観念は日本人の生まれつきの特質の上に成り立つものではなく、日本の美学者の数世紀

に重なった探索の結果であるという重要なポイントである。生まれつきの「日本的なるもの」の探求は『稿本日本帝国美術略史』も貫くものである。実は、明治時代だけではなく、ずっと以前から、そしてずっと後の時代にも存在した探求である。今になっても変わりなく、日本人は日本人の全てに通じる趣味や傾向を求めている。この「日本的なるもの」、あるいは「国風」の特徴への集中を前に、日本文化の多様性が犠牲にされる。日本文化の諸元素への理解も犠牲にされる。「日本人の美意識」を持たない日本人も犠牲にされる。さらに、「みやび」や「いき」などの美的観念を理解することもできず、その美を評価することもできなくなる。すべては同じものへと引っ張られる。

今回取り上げた三冊の著書は、日文研の素晴らしい図書館や研究状況のおかげで出会った。そのおかげで、「わび・さび」の枠を一步出ることができて、日本文化の多様性に目覚めた。「日本的なるもの」の眼鏡を外して、日本文化の多様な素晴らしさを理解したい。

(国際日本文化研究センター元外国人研究員)